

日本の凶悪犯罪

1160408 上瀬 恭平

高知工科大学 マネジメント学部

1. 序論

現在、日本では様々な犯罪が起こっている。新聞やテレビのニュースでは若者の凶悪な犯罪が目立っており、若者の凶悪犯罪が年々増えているかのように報道されている。しかし、日本の殺人率は世界で見ても格段に低く、若者の殺人率は低下している。それに対し中高年の殺人率は高くなっているが、マスコミに取り上げられることは少ない。

長谷川寿一・長谷川真理子 (2000) によれば世界的にみれば、男性の殺人率は20代前半に鋭いピークをみせるとしている。

彼らによると、この現象は調べられている限りほとんどの国や地域で共通してみられる。その理由として、殺人とは対人関係におけるリスク行動であるとみなすことができ、10代後半から20代前半という年頃は男性が繁殖行動に入る時期と一致しているからとしている。男性にとって、この時期にどれだけ自分の地位を確立し資源を確保するかということがその後の繁殖の可能性に大きな影響を及ぼす可能性があり、20代前半の男性殺人率の高さは男性の繁殖戦略と強く結びついているとしている。繁殖開始時の男性はメンツや評判にこだわり、多少のリスクを冒してもそのようなものを守りたいという動機づけが強い。人間の進化の歴史上、男性がこの時期にこのような心理特性をもつことは、その後の人生における男性間の競争や女性からの配偶者選択に有利に働いてきたとしている。

彼らが示したデータでは、日本でも1955年の年齢別殺人率のカーブはこの世界的なカーブとほとんど重なるものであった。しかし、それが年とともに20代のピークがたぶれて平坦になり、1990年代には40代や50代の男性の殺人率のほうが高くなった。

その理由として様々なことが考えられるが、最も重要なのは戦後日本の急激な高学歴化だとしている。戦後の経済繁栄とともに日本の農業人口が減り、雇用人口が増加した。しかも当時の日本の雇用の特徴は終身雇用制である。ここで、よりよい雇用条件を得るために高学歴が重要になってくる。20代の殺人率がピークを示してい

た1960年ほどの年齢段階でも義務教育止まりの男性がほとんどで、世代間ギャップのない時代だったが、高学歴化時代に入り、若い人ほど高校卒、大学卒の比率が高まっていったとしている。日本の経済構造では高学歴ほど先の生活が保障される。先の生活が保障されているほど、現在リスクを冒すと、将来を失う可能性が大きくなる。失うものが大きいと認知する人は同じ葛藤状況でもリスクは冒さない。このような理由から日本の若い世代の殺人率は低下していったとしている。

戦後の若者の犯罪率が徐々に減少していくのに対し、40代以上の年齢グループではさほど顕著な減少はみられていない。その理由は、戦後の急激な高学歴化社会に取り残された世代だからとしている。戦前ではほとんどの人が義務教育で終わっていたが、それが徐々に高学歴化になっていき、戦前の低学歴のまま高学歴社会に職を得なければいけなくなる。将来に不安を持ったこの世代は現在リスクを冒しやすくなり、殺人率は若い世代ほど低下しなかったとしている。実際に1990年代の中高年齢殺人の加害者の学歴は低いとされている。

しかし、この先行研究は戦後50年によるもので2000年代のデータはない。そこで本研究では、最近の犯罪率のデータを殺人・放火・強盗・強姦の種別ごとに集め、若者の殺人率の低下という現象、及び中高年の殺人率は低下しづらいという現象が続いているのかを検証した。

最近の殺人率(犯罪率)は戦後50年に比べ、減少していると思われる。若者に関しては戦後の減少傾向が続いており、2000年代でもその傾向は続いていると考えられる。中高年に関しても高校、大学に進学する人が増え、学歴による格差はなくなってきていると考えられる。戦後50年のような高学歴化社会についていけない人は減り、働いている人ほとんどが高学歴になることで将来への不安は減り、現在リスクを犯す可能性も減ると考える。

2. 方法

本研究では平成12年から平成24年までの犯罪件数のデータを用いて、殺人・放火・強盗・強姦の種別ごとに犯罪率を算出した。また、性別・年齢別にも犯罪率を算出した。算出した犯罪率を殺人・放火・強盗・強姦の4項目×性別の2項目（強姦率に関しては女性の場合、男性と共謀したということなので除外する）、計7項目でグラフ化した。

犯罪率の計算方法は「犯罪件数÷人口×1000000」とし、100万人あたりの犯罪率を算出した。犯罪件数は警察庁のホームページから引用し、人口は総務省統計局から引用した。

平成14年から平成24年までの犯罪件数のデータは「罪種別犯行時の年齢別検挙人員」のデータを引用したが、平成12年と平成13年はこのデータが無かったため、「罪種別主たる被疑者の犯行時の年齢別検挙件数」を用いた。そのため、平成12年と平成13年のデータを見る際には注意が必要である。

3. 結果

まず、男性の殺人率を図3-1に示す。

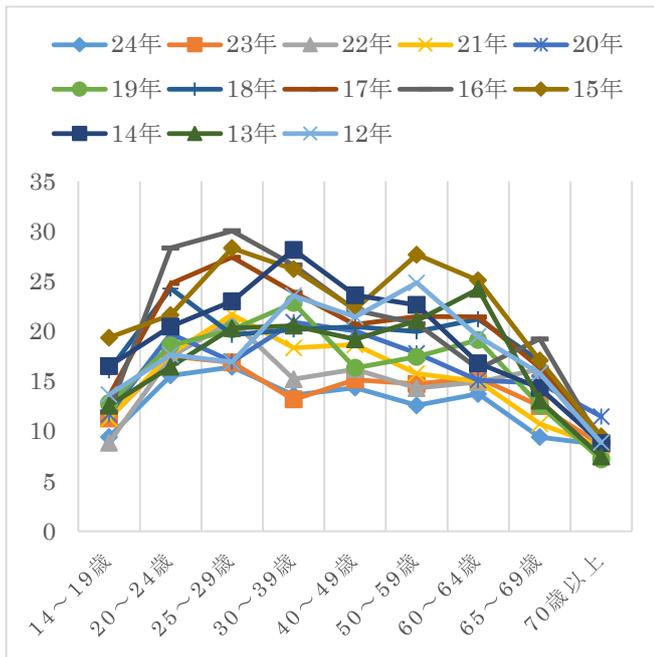


図3-1 男性年代別殺人率

男性の殺人率は全体的にみても、1994年（平成6年）の殺人率と比べてもわかるように減少は止まっているように思われる。また、平成21年から平成24年までは25~29歳までの20代の世代でピークを迎えている。それに対し、それ以降の平成12年から平成20年まではほとんどが30代でピークを迎えている。

このことを踏まえ、平成21年から平成24年までの平均と平成12年から平成20年までの平均をグラフ化した（図3-2）。

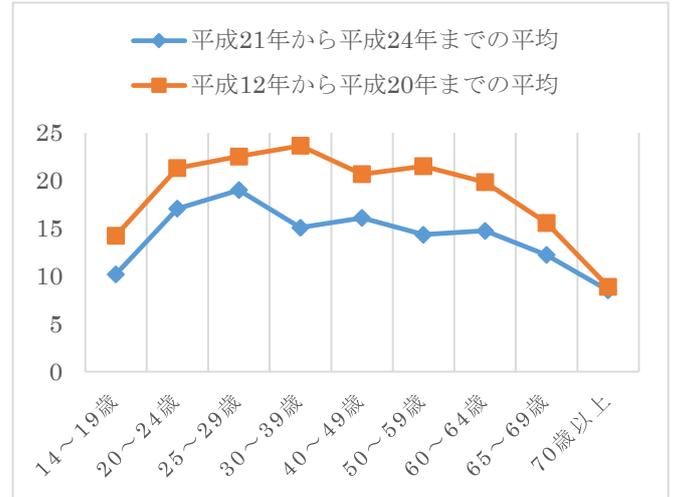


図3-2 平成21年から平成24年までの平均と平成12年から平成20年までの平均

この平均化したグラフをみると、平成21年から平成24年の殺人率は25~29歳でピークが来ている。それに対し、平成21年から平成20年の殺人率は30~39歳でピークが来ていることがわかる。

次に女性の殺人率を図3-3に示す。

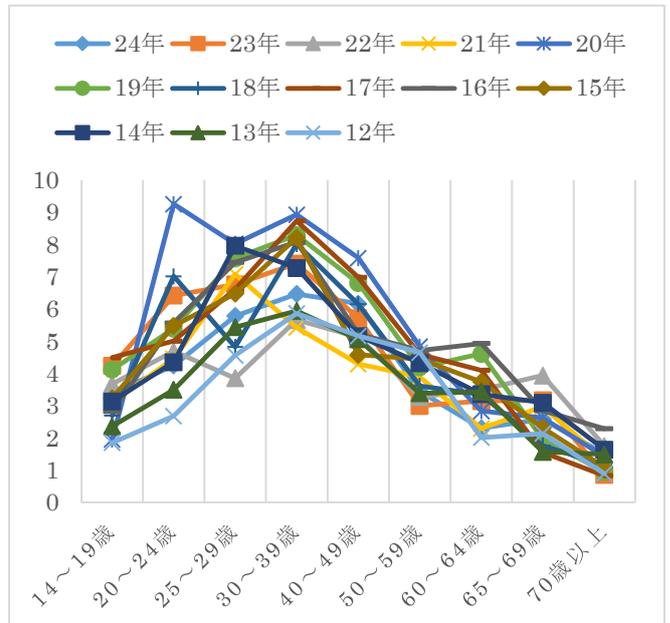


図3-3 女性年代別殺人率

女性の殺人率も男性と同様に20代または30代でピークを迎えている。しかし、男性のような年ごとの殺人率の変化はみられなかった。

次は男性の放火率を図3-4に示す。

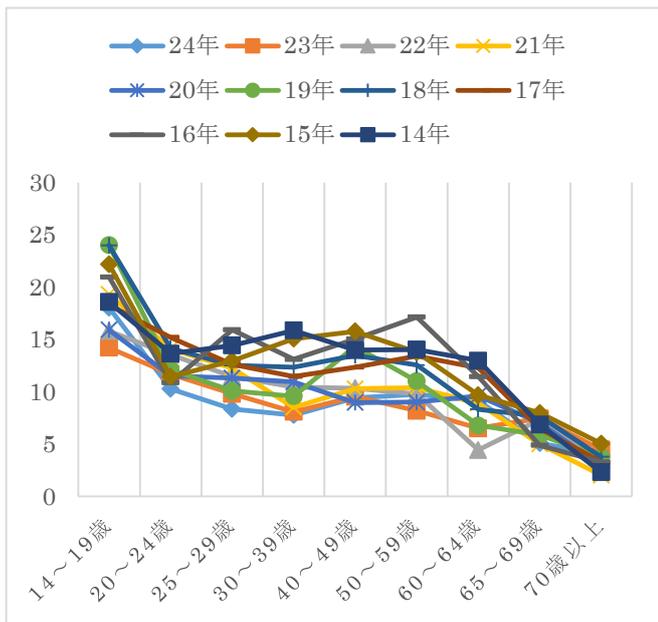


図3-4 男性年代別放火率

平成12年と平成13年に関しては違うデータを用いたため数値が大きくなり、グラフがみにくくなったので除外した。放火率に関しては年ごとの変化はみられないが、ピークがどの年でも10代になっている。このことは男性の殺人率とは大きく異なる。

次に女性の放火率を図3-5に示す。

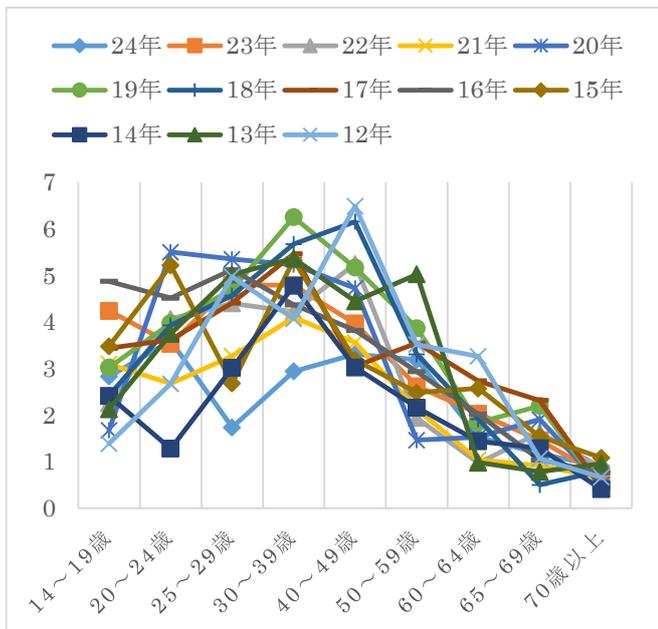


図3-5 女性年代別放火率

女性の放火率は男性の放火率とは違い、10代にピークがきていない。また、男性の放火率と比較して全体的な放火率が低いため年齢や年ごとの特徴がわかりにくくなっている。

次は男性の強盗率を図3-6に示す。

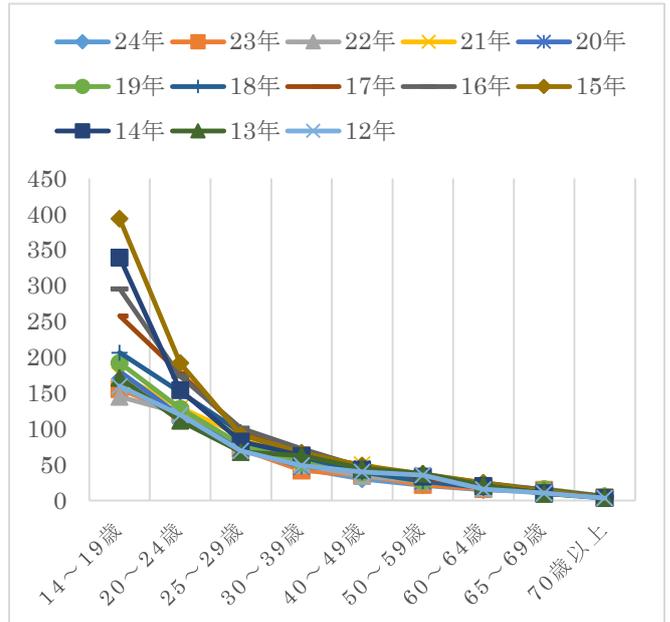


図3-6 男性年代別強盗率

強盗率に関しては今回データを取った殺人、放火、強姦と比較して最も犯罪率が高かった。強盗率についても放火率と同様に14歳~19歳の10代にピークがきており、年齢が上がるごとに減少している。

次に女性の強盗率を図3-7に示す。

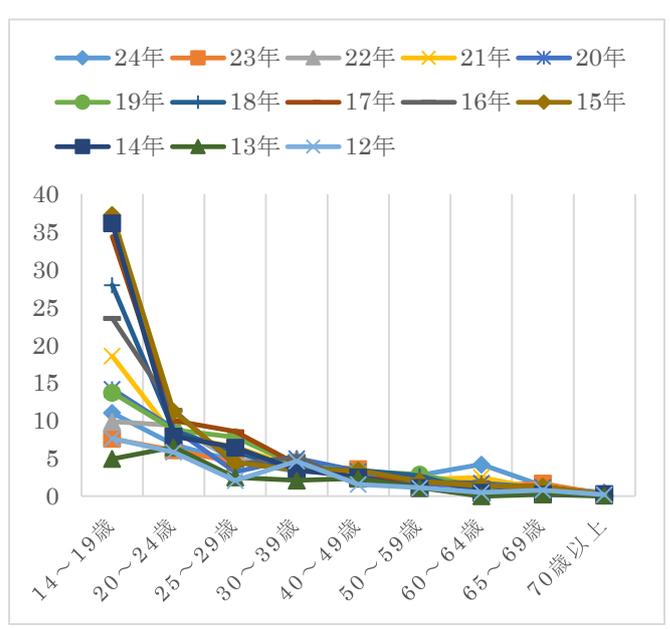


図3-7 女性年代別強盗率

女性に関しても男性の強盗率と同様に最も犯罪率が高く、10代にピークがきている。女性の場合も年齢が上がるごとに減少している。

最後は強姦率を図3-8に示す。

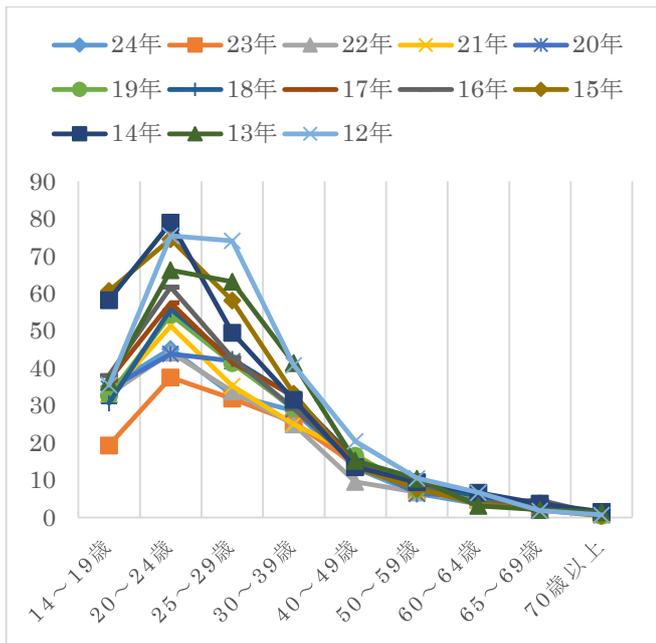


図3-8 男性年齢別強姦率

強姦率は10代から20代にかけてピークがきている。強姦率も強盗率と同様に年齢が上がるごとに減少していつている。年代ごとの特徴はみられない。

男性の強姦率と男性の殺人率のピークがともに20代にきているので、平成21年から平成24年と平成12年から平成20年までの平均をグラフ化し比較した(図3-9)。

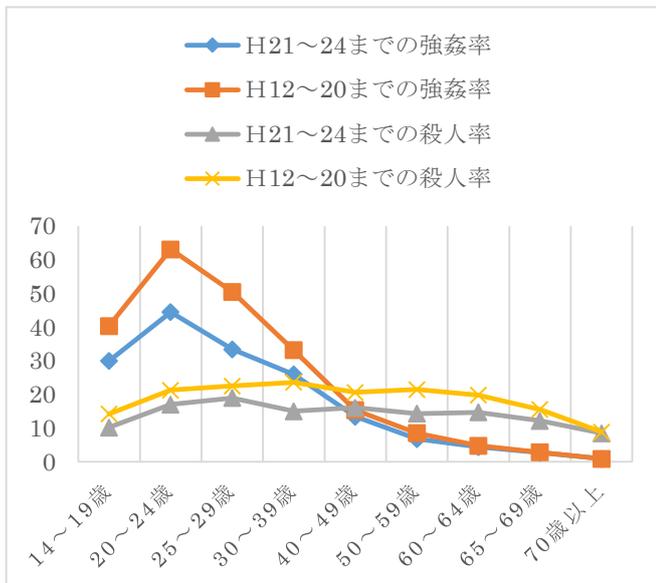


図3-9 男性殺人率と男性強姦率の比較

強姦率に関しては平成12年から平成20年までの平均と平成21年から平成24年までの平均にピークの差は殺人率のようにみられなかった。殺人率と強姦率を比較すると、40代で殺人率と強姦

率が逆転していることが示されている。強姦率は年齢が上がるごとに低下しているが、殺人率はあまり低下していない。

また、女性の強姦率は2方法で示した通り男性と共謀したことなので本研究では除外する。

4. 考察

全体の殺人率に関しては1994年(平成6年)から減少は止まっていた。また、平成12年から平成20年までは30代でピークを迎えていたが、平成21年から平成24年の4年間は20代でピークを迎えていた。最近のデータでは中高年より若い世代の殺人率が高いということがわかった。放火率は男性の場合、10代にピークがきていた。それに対し女性は10代の放火率は低く、20代から50代にかけてピークがきており年代ごとの特徴はみられなかった。強盗率は男女どちらも10代にピークがきており、率もほかの年代と比較しても非常に高くなっていた。年齢が高くなると強盗率は下がっていくという特徴も男女どちらにも共通していた。強姦率は20代にピークがきており、年齢が高くなると下がっていくという特徴もみられた。

殺人率以外の放火率、強盗率、強姦率に関しては10代から20代の若い世代でそれぞれピークを迎えている。先行研究でもあったようにこの世代は繁殖行動に入る時期であり、メンツや評判にこだわる世代である。そういった理由でこのような犯罪は若い世代の犯罪率が高くなっていると考えられる。

1994年(平成6年)からあまり殺人率が低下していない結果を踏まえ、以降、殺人率を低下させるための方策について考察したい。これ以上殺人率を下げるためには、学歴以外の要因が必要であると考えられる。高学歴化社会になった現代では学歴はこれ以上上がることは見込めないと考えるからだ。先行研究では40代以上のグループの殺人率が高いとしていたが、最近のデータではそのような傾向はみられない。やはり現代では高学歴化が進み、40代以上のグループも高学歴になっていると私は考える。最近ではほとんどの年齢で高学歴化になり、殺人率のピークは若い世代に移ってきている。学歴以外で殺人率を下げるためには雇用や給与などの経済の安定が必要だと私は考える。若い世代の殺人率は繁殖行動に入る時期であり、なかなか下がりにくいが、経済を安定させれば将来への不安も減りリスクを冒す人も減ってくると考える。そうすれば全体の

殺人率も低下するだろう。

5. 今後の課題

本研究では殺人率に関しては先行研究の殺人率と比較したが、放火率、強盗率、強姦率に関しては過去のデータと比較しなかった。そのため放火率、強盗率、強姦率は過去と最近ではどのような違いがあり、どのように変化してきているのかわからなかった。今後は放火率、強盗率、強姦率についても過去のデータと比較する必要があるだろう。

また、本研究では最近のデータでは若い世代の殺人率が高くなっていることがわかったが、その背景にはどのような要因があるのかということまでは調べるができなかった。今後は平成21年から平成24年の間に若い世代の殺人率を高める要因を調べる必要だと考えられる。

6. 引用文献

- [1] 長谷川寿一・長谷川真理子 (2000). 科学
戦後日本の殺人の動向 進化心理学, 70, 560-568.
- [2] 警察庁 白書・統計
<https://www.npa.go.jp/toukei/index.htm>
- [3] 総務省統計局 統計データ
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2.htm>